

あまのり ～天色便り～ まいるだよ

第7号 2011年6月発行

INDEX

- P1. 講演会感想文
- P2. 新理事の自己紹介
子育て日記
- P3. 「余計な荷物」本
- P4. 報告(巻頭、映画)



米も作る大工・どっぽ村 清水陽介さんのお話

清水さんは、生きていく上で必要なものを準備するとき「買う」のか「作る」のか線を引いて考えできるだけ「作る」ことを選び、どうしても「作れない」ものはゴミになることまで考えた上で「買う」と話されました。まさに、私たちの未来につながるお買い物の考え方と同じです。

しかし、「衣・食」は自分で作れても「住」だけはお金を払って専門家に依頼するもので、普通の人たちが「家」を「自分で作る」なんてありえないと決め付けていました。

ところが、この日は実際に、清水さんの下で家を作られた小林さんと玉崎さんも同席して体験談を語ってくださったので、いつの間にか私も「家は自分も参加して作るもの」という認識が変わっていきました。「衣食住」すべての分野で自給できるものなのですね。

また参加することが「コストダウン」につながるのでエコノミーでエコな「住」が実現できるのです。清水さんは、この方法で被災地にも「仮設」ではない住宅を供給したいとも話しておられました。

富岡 尚子



最近、原発のニュースを見ていると「基準」の危うさを感じます。基準値の意味や根拠は？ そんなモヤモヤを片隅に清水さんのお話を伺いました。

とっても印象深かったのは、家を作る過程でのたくさんの対話でした。

まず、清水さんと施主さんの対話、お話し会の中で施主さんが、清水さんをお願いしたおうちについて「住み心地がよい」「難しい事は清水さんに任せておけば安心」とおっしゃっていました。施主さんは、自身の想いや考え方をくみ取ってアイデア提案して下さる清水さんを信頼していました。

さらに、清水さんと柱、屋根、地盤との対話。法律に基づいた「基準」ではなく、清水さんご自身の経験や感覚で判断していることに強い覚悟を感じました。

世の中には様々な「基準」があふれていますが、もちろん一律に決められるものではありません。

清水さんと施主さんは信頼関係のもとに、共に納得のいく「家を手に入れ」「仕事を成し遂げれ」、家づくりの中にほっこりとしたあたたかさを感じました。

平山 奈央子



新理事さんリレー自己紹介

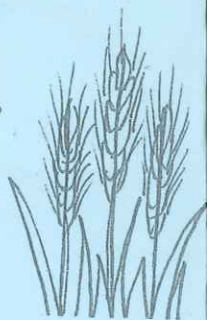


4月より新しい理事さんが決まりました。

上田洋平さん、川寄悦子さん、喜多亮夫さん、高木あゆみさん、瀧健太郎さん、平山奈央子さんです。

今号より新しい理事さんのリレー自己紹介を掲載いたします。

第10回 川寄悦子さん



はじめまして！今年度から新しく理事に加わりました川寄悦子(かわさき・えつこ)です。住まいは近江八幡市。昼間は、土・日曜日を除くほぼ毎日、水や農作物の中の農薬を測ったり食品中の添加物を分析する仕事をしています。そして夜は、主にダンナサンと一杯飲むのを楽しみにしています。

今、心にかかっていることは、やはり福島第1原発の事故による放射能汚染の問題と、ネオニコチノイド系農薬という殺虫剤の問題です。特に放射能汚染は、身内が関東に在住している関係で、とっても気がかりで、日夜、情報を集めています。滋賀に住むものにとっては、やはり、敦賀の原発の運転を止めることですね。そのための試みを、この夏から少しずつ始めようと思っています。といっても家の中の電球を少しずつLEDに替えるとか、エアコンを扇風機に替えるとか、駐車スペースの屋根に太陽光発電機の設置を検討するとか、本当にささやかなことで、お恥ずかしいのですが…。

理事として、どのようなお役に立てるのか、とっても不安ですが、少しでも「碧いびわ湖」のお力になれるよう努力したいと思っています。なにとぞヨロシクお願いします！！

川寄 悦子

好評連載

ねぎさんの子育て日記

ほ～たるこい

守山では、この季節になるとホタルが飛ぶ。ホタルにあわせたまちづくりもさかんで、今春オープンしたこども園でもコンサートがあり、家族で聴きに行った。

ホタルを見に出かけた日のこと。昼間から妻が息子に「ホタル見に行くよ」と話しかけていたので、出かける頃には、息子も「ほた、ほた」と言うようになっていた。息子を抱っこして扉をあけるとお向かいさんもちょうど出がけで一緒に階段を降りていった。息子が「ほた、ほた」と繰り返しているの、「これからホタルですか？」と尋ねられ、ついでに「近所にたくさん飛んでいるところがある」と教えてもらった。毎年行っているのは、ホタルよりも人の方が多いのではないか、ということだったが、教えてもらった場所は、それほど人が多くなく、ホタルはたくさん飛んでいた。(ナイス息子！)

ちなみに、ホタルを見せようとする私たちを横目に息子はと言うと、静かな暗がりの中、明かりをともした電車が騒然と走り抜けるのがうれしそうであった。



余計な荷物

夏山に登ったときのことで。仲間の一人が、歩き始めるとすぐに疲れます。原因は、彼の荷物が重すぎたためでした。訊けば、もしものことが心配で、食料も装備も多めに詰めてきた、とのこと。しかしその量は、誰から見ても多すぎました。せっかくの夏山を、その人は余計な荷物のために味わい損ねました。

振り返ると、今の僕たちの暮らしもまた、その人と同じようなものではないか、と思います。もし電気が足りなくなったら？もし収入が減ったら？もし、もし、もし…。

不安をあおるささやきに負け、僕らは、必要以上に装備を増やし、余計な負担を背負ってはいないでしょうか。そして自分の手に負いきれない負担を、物言えぬ日雇いの人たちや参政権のない子たち孫たちに押し付けてはいないでしょうか。原発は、その最たるものだと思います。

装備を増やさなくても、不安を解消することはできると思います。自分自身が智慧を身につけ、身近な人たちとの信頼を育むことで。課題の解決をひと任せにせず、自分たちの手で取り組むことで。自分たちの手のできることでできないことを識れば、要るものと要らないものが見きわめられるようになるでしょう。不安をあおるささやきにも、動じずにいられるようになるでしょう。

要らぬ荷物を手放せたならきっと、日々の暮らしの中の風景も、今よりずっと味わえるはず。

身一つで子育てにいそしむツバメたちの姿が、以前にも増して深く、たくましく目に映る夏です。村上 悟

この本が書かれたのは20年以上前。書いたのは当時20才の女の子だ。20年以上前に書かれたのに、内容は新鮮だ。

彼女は、学校が大嫌いだった。学校では、くだらない規則を守らせることに躍起になって、本当に大切なことがわからなくなっている。他の人と競争ばかりさせられて、都合よく型に押しこめられ、学歴ばかりを気にさせられる・・・そんな学校を彼女を辞めた。

学校を辞めてバラ色だったのに、世の中は暗かった。危険な原発のある社会に遭遇したのだった。そして原発について勉強して、勉強会を催して、デモに行き、集会に行き、反原発の歌を歌って……。原発は事故を起こさなくても核のゴミを出し続け、その処理の仕方もわかっていない。それなのに電気がなくては生きていけないなどと議論している大人を「頭悪いね、勉強できても、いのちがなくなったら生きていけないのにね。寝ぼけてる。(p.18)」と一蹴。原発も学校も一緒、どっちもひとりひとりの人間を大事にしない、と断言。20才の感覚は冴え渡っている。(そして40代の私は思う、いまや原発がなくても電力は足りているのだ、原発を続ける意味が微塵でもあるのか。)

この本を読んで再確認できたことがある。それは、今までの教育体制が今の日本を作っているのだということ。自分でものを考えない、自分で選択できない、常に上からの指令を待つ、まわりに流される、一人の弱者より権力を持った強者を大事にする、隣人より自分のテストの点数の方が大事……。だから、遠い福島で起きていることは自分にはあまり関係ない、原発止めると電気がなくなるから困る、政府が言っていること(大本営発表)が唯一正しい、自主避難をすると「自分だけ助けられればいいのか」と言われる……。のだ。ひとことで言えば、想像力の欠陥。

それにしても、まるで20年前の本だとは思えないほど、この本の中のはなしは現在進行形だ。少なくとも20年も前からなされていた警告を、私たち大人が真摯に受け止めてこなかったのだ。だから、フクシマが起きたのだ。

そして、これからどうするか、だ。またこのまま20年30年とすぎるのか、誰かを被曝させ続けて電気を作るのか。それとも、新しい歴史を築けるのか……。いやいや、あと一発爆発すれば日本は死の列島になる。20年30年先はないのだ。まさに今、想像力が問われているのである。

中野和子



本の紹介

『超ウルトラ原発子ども』

(伊藤書佳著)

シラバ・インターメディア社

さる4月16日、17日に大津百町館にて、オーガニックイベントが開催されました。これは「大津の町屋を考える会」が、10年にわたり、当地の商店街活性化運動を行ってきた中でも、全く毛色の違う催しでした。従来のお祭りのイベントに、環境の要素が加わったという点で、「碧いびわ湖」関係者の私としては、大いに熱が入りました。というのも、旧環境生協時代に隆盛を極めていたエコロジーマーケットが、次第に衰退していった様を、そして、運動の継続の難しさを痛感していた者にとっては、一条の灯りともいえるものでしたから。その大きな違いは、集う仲間が以前では企業や行政であったのが、個人へと移っていったと言う事で、ひとえにそれぞれの個人が強くなったのではないかと思うのです。

この催しを発案した有限会社 ガイアコミュニティの力量には、本当に感服しました。私たちは彼らの推奨する「人・もの・コトの有機的なつながり」を、見事に実感できたのです。また、これに協力して頂いた、オーガニック料理教室の「オープンセサミ」さん、オーガニックコットンの手作りマスク教室の「優布」さん、「東日本大震災報告会」の田中光一さん、オーガニック弁当の「晴粒」さん、「滋賀おむつなし育児の会」さん、オーガニックケーキの「むいむい」さん、オーガニック野菜の「なごみの里」さん、そして我らの「碧いびわ湖」、本当にありがとう。来場者300人だった大津にオーガニックな風が吹いた2日間でした。浅野博子

映画「幸せの経済学」(5/2)

3. 11後、これまで身をおいていた日本の社会全体が、私の中で、足元から崩れ落ち、先行きの見えない不安と、何の力にもなれない自分の存在の小ささに気が滅入ったまま過ぎしていました。

そんな私に、映画「幸せの経済学」は、私たちの目指すべきもの、私たちの行くべきところを暗示し、一条の光を投げかけてくれました。

グローバリゼーションという名の下で、崩されていく、文化、伝統、価値観そして押し付けられていく近代化、引き起こされる様々な負荷・・・これまで幸せと感じていた人までも、同じ暮らしの中にありながら、貧しい、不幸だと感じ方が変わってしまうくらい。持ち込まれた単一の尺度は、物欲をあおりたて、土地を荒らし、人の心をすさませていく。

キーワードは、ローカリゼーション。

自分の暮らしている場所に根を下ろし、人と人とのつながりを回復し、その土地にふさわしい生き方を見出していく。それが、持続可能な暮らしにつながっていく。ヒントは、ついこの間まで、私たちの祖先が長年、培ってきた生き方にあるのだから。

内藤 寿美子

「まずは知らなきゃね」を手にしたときものすご〜くわかりやすくまとめてあって、あすのわさんすごい☆と思いました。

そして、これをどんどん配ってとにかく知ってもらわないと！と自分の中で（しばらく休眠していた）スイッチが入りました。とはいえ、自分の思いを人に伝えるのが苦手なわたし・・・

とくに原子力関連の話題は、相手方にどのような背景があるのかなど探り探りに話すようなデリケートな問題なので、躊躇することがしばしばありました。でも今回の福島事故を受けて、自分が原子力の問題について深く知り理解することで相手に伝えられるようになる、という次のステップに（自分の暮らしぶり・人となりなども周囲の人に理解してもらいながら）進んでいかななくてはいけないと痛感しました。

今回勉強会に参加して同じ思いで集った人たちの多さに感動しました。そして少しずつでも自分も頑張ろう、と勇気付けられました。ありがとうございました。

富江 小夜香

「碧いびわ湖」情報紙「あまいろだより～天色便り～」第7号

発行日 2011年6月10日

編集 びわこ未来プロジェクト

発行

特定非営利活動法人

碧いびわ湖 (旧滋賀県環境生活協同組合)

521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦3番地

TEL0748-46-4551/FAX0748-46-4550

Eメール info@aoibiwako.org

びわこ未来blog更新中～♪

http://aoibiwako.shiga-saku.net/ (滋賀咲くブログ)

